

保育者の好ましい語りかけ

—— 保護者との伝えあいの事例より ——

豊 永 家 壽 子

保育者養成において重要視されることの一つに、子どもを見る力を育てることがある。その力は、学生が乳幼児と触れあう中で、子どもが持つ生命力やその表われに感動することによって、少しずつ養われていくものであると考えている。

しかし、最近の学生は子どもとの触れあいもほとんどなく、まして、子どもと共感しあう機会に恵まれて

いない。したがって、専門的な知識・技術について具体的な例をあげて説明しても、学生は大切なこととして受けとめられないようである。

一方、私たちは保育現場の人々や園の保護者とかかわる中で、保育者の心ない発言に対する不満や、保育者から相当なショックを受ける保護者の存在が気にかかる。その反面、保育者が日々の保育の中での子ども

の姿を保護者に伝え、両者の感動体験から信頼関係が深まっていく事例も多く耳にする。いずれにしても、保育者が一人一人の子どもをよく見、真剣にかかわっているか否かが問われているといえる。

そこで、感性とその表現の豊かな保育者養成のためには、どのような試みをすればよいのかを求めて、保護者の心を打つ保育者への語りかけをできるだけ具体的な場面の中でとらえ、学生指導に役立てたいと考えた。

一、はじめに

乳幼児を保育所や幼稚園に入園させている保護者は保育者を信頼し、園生活を通して子どもが成長していくことを期待している。中には子育てに無関心で園任せの人もあるし、園や保育者に不満を持つ人もいる。しかし、大部分の保護者は、保育者から知らされるわが子の変化や育ちに喜びを感じ、自分の子育てについ

ての反省の機会ともしている。

保護者の心を動かす保育者の語りかけが好ましいものであれば、子育てへの希望や意欲を抱くことができ。一方、保育者の不用意なひとことが保護者の心を傷つけ、子どもを巻きこんでしまうこともある。

今日、核家族化が進み、子育ての具体的、直接的な情報や実際的な援助が乏しい保護者を、精神的に支えていく役割の一端を保育者が担っているといえる。両者が連携を図り、園と家庭の生活がスムーズに流れていく中で、個々の子どもが健やかな発達を遂げるように援助すべきであると考える。



そこで本研究は、保護者が保育者からの語りかけをどのように受けとめ、また、何を期待しているのか、その率直な声を集約して、広く保育者養成に役立てることを目的とした。

二、調査方法

調査方法は、聴き取り調査およびアンケートによる調査（園の職員を通さず直接回収）で、保育者の語りかけをプラス思考で受けとめた事例を中心に、園および保育者への具体的要望もあわせ集約した。

調査対象は、東京都・神奈川県・千葉県・福岡県・大分県の保育所・幼稚園児約七十名の保護者と対象に行ない、八十余の事例が寄せられた。

調査時期は、一九九六年十月～十二月である。

調査内容を、子ども・保育者・保護者の三つに分類して考察したが、その内容は相互に関連している。

三、結果と考察

本研究の目的にしたがい、主な事例を取りあげ、会話を「」、保護者の感想等を（）、考察をへ」として示す。

(一) 子ども自身の発達・友達との育ちあい

事例1 オムツ取り（一歳）

「きょう初めてオマルにおしっこが出ました。そのおしっこを持って帰りたいくらい嬉しかったです」

（毎日きまった時刻にオマルに座らせて、オムツ取りに協力して下さった）

（保育者の感じ方に保護者が感動し信頼感を増す）

事例2 頭にこぶ（二歳）

「手当てをしたので大丈夫と思いますが、お家でも様子をみて下さい。すみませんでした」

（その夜「〇ちゃんいかがでしょうか。大丈夫ですか」と電話があった）

〈保育者の責任感に、保護者も保育者を気遣い、かえって信頼関係が深まる〉

事例3 もう△歳・まだ△歳（二三歳）

担任は「本の読み聞かせの時も一人だけ座ってないで、ふらふら歩き回って落ち着きがない」。別の保育者は「もう△歳になったから、あれもこれもしてほしい、できてほしい。他の子と同じように……とばかり考えてはダメですよ。まだ△歳だからと考えることも大切です」。

〈子どもの現象をもう△歳とみるか、まだ△歳とみるかによって、保育者の子どもへの接し方が変化する〉

事例4 面接の時（五歳）

保育者A「身支度をしったり並んだりするのが、いつ

もとても遅いんですよ。あのまま小学校に入ったら、

体操服を着替えてる間に、体育の授業終わるんじゃないかと思うくらい遅いんです」。保育者B「何かしよるとする途中でお友達の所へ寄って、おもしろいこと見つけるとそっちの方に夢中になって、頭の中はそのことでもいいで、今何をしなければならなかったことなんか、全然考えてないんですよ」。その子どもの小学校の担任「頭の中で色々とふくらませるのって、すばらしいじゃないですか。その空想の中をちょっとのぞかせてほしいですね。今のところ全く問題ありませんよ」。

（毎日「早く、早く」とビシビシ叱ればいいのだからかと不安になったが、小学生になってからはっとした）

〈子どもの言動に対して、子どもの側に立って気持を汲みとろうとするか、大人の側から一方的に見るかによって、子ども理解が異なってくる〉

事例5 障害児との触れあい（五歳）

園で、障害のある子どもの世話を、周りの子どもたちが自然な姿でやっている機会に出会い、何度となくとても嬉しく思った。同じ仲間として生活する、そういう教育を取り入れて下さった保育所に感謝している。

〈個人差の著しい乳幼児期は、発達に応じた援助とともに、子ども同士が育ちあう環境が必要である〉

(二) 保育者の人間性・専門性

事例1 オムツのたたみ方（二か月）

保育園と違うオムツのたたみ方を変えようとする保護者に、「この折り方、初めてだから勉強になります。教えて下さい」。

〈保護者の気持を受けとめ、保護者からも学ぼうとする姿勢がみられる〉

事例2 うんちの始末（二歳）

まだ一人では上手にできない。帰宅後脱いだパンツを見ると、うんちがついていた。「どうしたの」「自分で拭いた」「どうして先生に『拭いて』って言わなかったの」「あのね、先生に『拭いて』って言ったの。そしたら、『もう!!』って言ったから、自分で拭いた」。

〈子どもなりに保育者に気がつかっているのだなあと思った〉

〈保育者の子どもの発達への理解不足と無神経な言葉は、子どもの心を傷つけ、信頼感が薄れる〉

事例3 どんご遊び（三歳）

病気がちで外遊びの経験が少なく、素足で地面に立つことさえできなかった子どもが、半年後にどんご遊びができるようになった。その様子を写真に撮り、贈って下さった。

〈友達のとろんこ遊びに興味を示した時を見逃さず
に、共に遊びながら継続した援助を行なうことで子ど
もが伸び、保護者との共感が得られる〉

事例4 ハーモニカ(四歳)

演奏会の前に保護者が「○ちゃんのハーモニカ、特
別なものにしてあげるね」と、セロテープで巻いた
ハーモニカを子どもに渡した。帰宅して「お母さん、
どうして僕だけ特別なの」と聞く。

(何も答えられず、園を変える決心をした)

〈保育者は会の成功を目ざし、評価を気にするあまり
子どもの気持を汲みとらず、プライドを傷つける〉

事例5 子どもが見えない(四歳)

「園ではどんなでしょうか」「これといって問題はあ
りませんよ」「どんな遊びをしていますか」「きょうは
折紙で遊んでいました」

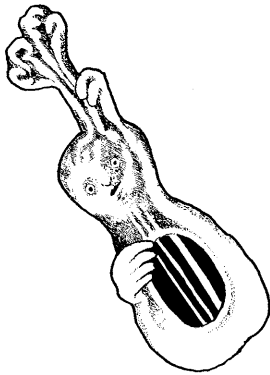
(尋ねなければ何も言わない)

〈園での様子を知りたい保護者の願いに応えることに
よって保護者の安心感や信頼感が増す〉

事例6 車の絵(四歳)

「三十台ぐらい、園庭いっぱい車の絵を描きまし
た。どれも型が違って同じものが一台もないんです
よ」

(車の一台一台に目を向けて、喜んで下さった。親に
とってこんな嬉しいことはない)



〈保護者に保育者の子どもへの愛情が伝わり、感謝の気持ち湧く〉

事例7 かけっこ（五歳）

かけっこの練習でいつも一番になれない。運動会当日、保育者は子どもの肩をポンとたたき、「きょうは本気で走ってごらん」。子どもは用意・ドンで一番に飛び出した。結果は二番だったが、本人は一生懸命走ったことに満足した。

〈運動会という大きな行事の中で、一人の子どもの心の動きに気づいた保育者の温かいかわりで、子どもが励まされ、これを機会に信頼関係も深まる〉

(三) 保護者の子育て支援・家庭との連携

事例1 どうぞお仕事に（六か月）

登園してすぐうんちを始めた。終わりを待って始末してと思っていると、「お母さん、後は私がしますか

ら、どうぞお仕事に行ってください」「でもうんちの始末が……」「朝からうんちなんて、とても気持ちいいじゃないですか。元気なうんち見るの、私大好きです。だから、どうぞ気にしないで早くいらして!」。

〈恐縮しつつも、若い保育者の声をさわやかに、嬉しく感じた〉

〈遅刻させまいとの温かい対応、ここに日ごろの子どもへの愛情も感じられ、両者のよい関係がみられる〉

事例2 連絡帳・降園時のひとこと

◇「お母さん、きょう三步、歩きましたよ」と声をはずませて話して下さった。

（一つ一つの成長を自分のことのように喜んで下さる保育者のことが大好きな子どもになった）

〈子どもの成長を喜びあうことによって、保護者は子育てへの希望を抱く〉

◇「きょう〇ちゃんから、お父さんとお母さんの……

の話を聞きました。とっても楽しかったです。○ちゃんありがとう」。

（この保育者は、日ごろも子どもから喜びをもらって嬉しいという表現が多い。また、さりげなく自分の子育て経験―失敗例も―を語って下さる）

〈喜びの共有、子育てを担いあっていると実感する〉
◇「お母さんお帰りなさい。お疲れさまでした。○ちゃん元気でよく遊びましたよ」。

（一泊の出張帰りでお迎えの時、いたわりの言葉をかけて頂いた）

〈留守中の心配も疲れもとれ、思いを受けとめてくれる優しい言葉に、保育者との距離感の変化を感じる〉

四、要約

この調査から、保護者が求めているものは、極めて具体的な園生活での情報であることが明確になった。

保育者が子どもの発達のみちすじをおさえ、園生活

にみる子どもの育ちを伝えたり、自己の体験を交えて語る中で保護者が励まされ、両者の信頼関係が得られる。そこに子育てを共有する一体感も生まれ、保護者の心が開かれていく。このことが、保育者と子どもとの良好な関係を築くことにもなる。

したがって、保育者養成の中で、専門的な知識・技術はもとより、保育の心をいかにして育てていくのが問われる。

まず、保育の原点に戻り、子ども・保育者・保護者もつと素朴に感じあい、お互いの成長が期待されるような人間関係を築いていくことが大切である。

五、おわりに

本調査を総括し、今後の方策を次のように考える。

保護者が知り得ないその日の子どもをつぶやきや行動、友達との触れあいなどを、連絡帳を通して、あるいは送迎時のさりげないひとことで伝える。言葉に表

情と心をこめて、子どもの具体的な姿や場面を伝えることで、保護者は一日の疲れを忘れ、家庭と仕事の両立への意欲をかきたてられる。

このように、子育ての共有・支援は、日常生活の中のささやかな言葉のやりとりや感じあいによって達成されていくことに留意して、学生指導にあたりたい。

しかし、保育者を養成する立場にある私たちは、学生の生活とどうかかわり、そこに何が見えているのだろうか。どのような温かい励ましや称賛を行ない、あるいは嘆き悲しみを共感しているだろうか。日常的な学生指導が省みられるところである。

今後の課題として、まず、私たちは学生一人一人にかかわりを持つ工夫をし、様々な場面・機会をとらえて、学生が主体的に課題を見つけ、判断する問題解決能力を培うよう個別指導を行なっていく。

次に、学生自身の人間性と保育者としての専門性を高めるためには、特に異世代の人々との交流の必要性

を説き、学生自らもそれが実感できるよう、実習研究等の授業の中で、このたびの事例を取りあげ、言葉の持つ意味を意識的にとらえることを習慣づけていきたい。

(別府大学短期大学部)

注1 本稿は、日本保育学会第五十回大会において共同研究^{注2}として報告したことを基に、掲載できなかった事例等を書き加えた。

注2 共同研究者

三池裕子(久留米信愛女学院短期大学)

原田康子(和泉短期大学)

坂口りつ子(西南学院大学)